

注解『七十一番職人歌合』稿(二)

下 房 俊 一

凡例

- 一、本稿には『七十一番職人歌合』の中、第四番から第七番までの注解を収めた。
一、【本文】について(追加) (6)判読不能の箇所は、□として残した。

四番 紺搔 機織

【職人尽】

〔十二番本 東北院職人歌合〕 七番左 紺搔

月すめは夜半の嵐の色あけてむらこに見ゆる杜のしたかけ

左、風情めつらしくとりなされたる。題を五文字にすゑられたる、聊耳に立侍る。右、……今すこしねぬ夜の月に心ひかれ侍り。

うとくなる人の心のはなあさきいくしほそめて色あさからん

左右、哥の心をめつらしくとりなして、誠にいひしりて侍り。心詞艶にして、哥の姿をかねたり。たとへは、梅林風前に仙方の雪かとうたかひ、紫藤の露の底に崑崙の玉をあらそひて、紅紫二の色、深淺弁かたし。右の歌のうきぬなは、今すこし上手のしわざと覚て、住吉玉津島もさためてゆるし給ふらん。

〔鶴岡放生会職人歌合〕 五番右 綾織

注解『七十一番職人歌合』稿(二)

雲鳥のあやとそ月にみなさましたなひく雲にはつ雁のこゑ
こよひさへいもかこまくらよそにしておほとゝのゐにやひとりあかさ

判云、月は、雲鳥の綾もをりえたる心地して侍れと、ゑしまの波は見どころたちまざると申へし。恋の番も、左
……優に侍へし。右は、つくろはぬ様にきこえて、歌めきたる事なければ、猶左の勝にこそ。

〔飛鳥井雅康 職人歌〕 九番左 青や

つばこうのたゝしほの空色にひかりそへたる秋のよの月

〔伝鳥丸光広作 職人歌合〕 紺搔 磨る墨に手の先なれど染めなして法の道にも入る紺屋かな 栄耀してひらりと散らすたびら
雪これや紺屋の被き帷子〔吾吟我集〕 寄紺搔恋 つれもなき人は紺屋の明日明後日あひそめん日を延び延びに言ふ / 職人
棚機を織れる糸屋の職女こそ天乙女にも劣るまじけれ〔古今夷曲集〕 紺搔 紋のみか詠へやうのいろいろに染めなす絹のいと利
こんかき / 題知らず それもいさ爪に藍滲む張物の簾取り置く手繰姿よ / 紺搔に仏道修しえたるありと聞きて、ある人の
行きて事の理尋ねければ、返事に、板を鐘篋を鐘木にとりなしてかたのごくものり教えませし〔訓蒙図彙〕 染匠 そめどの 染
工同 / 機女 はたおり 織婦 機女、並ビニ同ジ。〔長崎一見 職人一首〕 八番左 紺搔 紺搔が今日見そめぬる花色は面白
袴着てぞ知りぬる 左の紺搔の古袴、右……いづれもいづれも、その本文ありてあわれにこそ。……左は紺屋の朝公朝公、面白く
聞こゆ。もちいたし〔堀川百首題狂歌合〕 片思 右 恋衣そむる紺屋の片思ひあさていふばかりにて 右、紺屋の片思
ひ、あさてあさてとうち歎きたる風情、今少し勝るにや侍らん。〔銀葉夷歌集〕 紺屋のあさてと云ふ世話を、明日染めむいやあさ
てとや紺屋殿降る五月雨の空言をのみ〔太女〕 〔人倫訓蒙図彙〕 紺屋 紋付品々色模様を染める。当世茶屋染めあり。大夫染め、
吉長染め等は別家により。これを染物屋といふ。又菅原染め、右近染めこれをなす。 / 機織 巻物、をよそ唐土渡すところの
沙綾緞子、その外毛織の類に至るまで織るなり。此の職人西陣に住す。男女の所作なり。また、奥嶋とろめんの類、木綿、国々よ
り出づる。〔和国百女〕 棚機にて紗綾、縮緬、綾、錦、緞子などを、日本にて織る事稀なりしが、近頃頃は、堺、京都などにて、
いかなる物も織り出す。その上、絶間の中將姫、蓮の糸にて曼陀羅を織り給ひし時は、観音菩薩の綾を取り、糸をあてがい給ふと
かや。その外、衣通姫、棚機姫などは、みな神仏菩薩等の再誕にて、織り給ふ由。今の人は賢しうして、何にても自由に織り出す
ことを得たり。京、堺にて、万の織物する所を織殿屋と名づけて、方々より色々の織物詠ゆる由。〔狂詠犬百人一首〕 紺搔者院は
いた 何が絵の声の枯れ葉の一本に気を尽くしてや染め渡るべき〔用明天皇職人鑑 職人づくし〕 さして降らねど紅葉葉も、時
雨の雲に染物屋、染めて上給屋縫物屋〔百人女郎品定〕 機匠、糸繰、人皇十五代応神天皇の御時、唐土より二人の女工を送る。

あやめ、いとめの女婦を添へ、呉羽の里にて綾錦を織りて、御衣になりしより、女工の長き宮みなり〔狂歌ますかがみ〕寄紺屋恋 この文に思ひそめしを白上げのあいとなりとも返事聞きたや〔狂歌活玉集〕寄染物屋恋 尻口のあはぬ月日を便々と侍たは紺屋のあさつてじやもの〔契因〕〔今様職人尽百人一首〕紺屋 段染めのおくくの小紋出来にけりとくだしふだはたらすもあげなん〔六兵衛、降りはせまいか〕「なんだ、ふりのかはいやか」〔彩画職人部類〕織殿 応神天皇三十七年の春、阿知使主、都加使主を異国に遣はし、縫工女を求め給ふ。兄媛、弟媛、呉織、穴織、四たりの婦来たれり。是、始めなり。金襴、唐織は、京都西陣野木氏俵屋何某が織り出す所、始めなりとぞ。〔職人尽発句合〕紺搔 春陽の日陰や藍の深緑 紺搔が藍壺に春の日の射し映りたるを深緑に色よく取り成したり。……可為持。／織殿 夕立や織り込む箔の稲光 織殿の手業のむつかしき仕立て、ことごとしくて受けがたし。〔職人尽狂歌合〕染物師・機織 明後日まで我が宮みを断りて花に心を染物師ぞや 縮み織る賤も盛りに咲く花をまつ一たんは雪とこそ見れ 左、宮みをさへ明後日までと言ひ延ばせしは、執心言ふばかりなくや。ただし、結句あまりにうるはしくうち名告られしに、少しゆかしさも覚めて侍り。右、越のあたりに住める人は雪に慣らひて侍るべければ、最初は雪ともしも見たらんこと、さも侍るべし。四の句、秀句よろしく聞こゆ。ただし、結句の、見れといふ詞は、見めと改めつ。尤も勝たるべし。／染物師・機織 西明寺殿の貫布も染めあへて花の雪には白袴着つ 孟母にはあらぬものから機織も立たまく惜しき花の下蔭 左、紺搔の白袴、作意よろし。されど、右、孟母が古事もて、古今集なる唐錦の歌に取り合せられし、興少なからず。／染物師 一片の雲か浅黄の桜花嵐よ東風の返し染めすな 左、後拾遺集なる兼俊母の歌も思ひ出でられておかしく侍り。……仍左為勝。〔近世職人尽絵詞〕「薄縹は染めにくくて」「紺搔の白袴と口惜しくも言はるる。明後日は女房どもの湯帷子を染めて遣はさばや」「御婚禮があるとして、飾磨の裾染めをお好みある。忙しや」「ただ一入染めよと仰せらるる」「瑠璃紺を御詔へ候ふ。大事に候ふ」「あな眠たや。ちと舟漕がばや」〔略画職人尽〕はかなくも足動かして水鳥の模様織り出す浪の綾糸〔難波職人歌合〕下

二番左、呉服屋 古のくれはあやはの機物のをさく／＼人に恋は劣らじ 右の方人云、昔唐国よりくれはとり、あやはとりの機織女を奉れりしこと、日本書紀に見えれば、今言ふ呉服はやがてそのくれはたの字音なるべし。依て自らの上を長々と詠み入れられたること、この歌には不用に聞こゆ。いかがと云ふべし。左方答、機の箴に云ひ懸けたるにて、いはゆる序歌なり。古歌にこの姿多きを知らずや。右 紺屋 紫の灰合ひがたき思ひをば染めてあやなく色に出にけり 左の方人云、この作者は紺搔なれば、思ひを染めて色に出でたりといふ心は聞こえたれども、二の句の辺りたど／＼して詞分きがたし。右方答、延喜式、染物の料に灰ありて則ち紫に灰さすこと、万葉集、後拾遺集などの歌にも見えたるをや。判に云、左の歌、上は序にて、機の箴よりまたをさく／＼の詞に云ひ懸けられたる一首の姿、たけありなりとめてたし。右の歌、紫を染むるには灰の合はせがたきものなる由、源氏物語にも見えて、これは二の句にいみじう力あるなり。さて、あやなく色にと云ひ下されたる口つき、大方ならず聞こえた。左も負くべき歌にはあらねど、なほ右の方に心引かるれば勝とす。

【本文】

四番

つほこうのたゝひとしほのそら色に

ひかりそへたるあきの夜の月

よるさへやおりとをさましはたいとの

たてぬきしるく見ゆる月かけ

左は、我道のさいかく、まことにきこえたり。右

は、哥さまうるはしくて、しかも月のことなる

をほめたり。はた絲は心ひくすち也。勝へくや。

しかま川あふ瀬もいつとちきらぬに

あなかちひとのこひしかるらむ

おりはつるしつはたおひの今はとて

いつうちとけてあひみそめまし

左右ともに、歌さまよろし。しゐて勝負

あるへきならば、右の哥、五文字より末の句まで

よくいひかなへり。すこしはまさるとや申へからむ。



こうかき

たゝ一

つほこう〔類〕壺こう たゝひとしほ〔類〕只一しほ

ひかり〔類〕光 あき〔類〕秋

おり〔類〕織 はたいと〔類〕機絲

見ゆる〔尊〕〔類〕みゆる 月かけ〔類〕月影

さいかく〔類〕才覚 まことに〔類〕誠に きこえたり〔類〕聞えたり

哥さま〔類〕歌さま うるはしくて〔目〕うる□しくて

ほめたり〔類〕褒たり 心ひくすち〔類〕心引筋

あふ瀬〔類〕逢瀬

ひと〔類〕人 こひしかるらむ〔類〕恋しかるらん

おりはつる〔類〕織はつる しつはたおひ〔類〕しつ機帯

申へからむ〔類〕申へからん

こうかき〔目〕〔類〕紺搔〔忠〕紺搔四番こうかき

しほ

そめよと

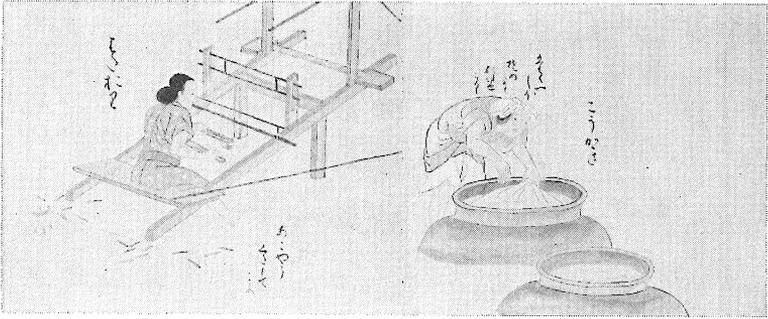
おほせ

らるる。

はたおり

あこやう、

くたあてこよ。



そめよー〔白〕忠〔染〕

おほせー〔白〕忠〔仰〕

はたおりー〔白〕忠〔類〕機織

あこやうー〔白〕あこよ〔忠〕あこよあこよ

もてこよー〔白〕もて□よ

【語注】

◎紺搔は、藍で布を染める職人。近世以降は、染物屋一般をも指すようになった。当時は女性中心の職業であったらしい。「こうがき」は「こんがき」の転訛。「搔く」は、壺の中で布を搔き回すことを言う。

機織も、古来、女性の家内労働であった。ともに女性の、かつ衣料に関わる職人。

◎つぼこうの…… 『飛鳥井雅康 職人歌』九番左に同じ。

◎つぼこう 「壺紺」で、壺の中の染料を言うか。未考。

◎ただひとしほ 「入」は、布を染料に浸す度数。藍染めでは、この度数が増すに従って、空色から青、紺と色が濃くなる。絵の職人の言葉にも、「ただ一入染めよと仰せらるる」とあって、この歌と照応している。

◎そら色 「ただ一入」だから「空色」なのである。「月」の縁語。

◎ひかりそへたるあきの夜の月 秋の月が、空色に光を添えているのである。月が何かに光を添える、という表現は、「濁りなく千代を数へて澄む水に光を添ふる秋の夜の月〈平兼盛〉（後拾遺集、四、秋）、「曇りなく玉の台の磨けるに光を添ふる秋の夜の月〈信濃〉」（高陽院七番歌合、月、六番左）、「さもこそは鏡の山のかひならめ光を添ふる秋の夜の月〈宣兼〉」（右衛門督家歌合、秋月、十番右）、「花の色に光さし添ふ春の夜ぞ木の間の月は見るべかりける〈上西門院兵衛〉」（千載集、一、春）など、しばしば用いられる技法。「添ふ」というのであるから、澄む水、花の色、玉の台などの、もともと美しく輝いているものに対して言う。ここは紺搔らしく、染物の空色に光を添える、とした点が巧みでもあり、滑稽でもある。

◎よるさへやおりとをさまし 月が明るいので、夜さえも寝ないで織り徹そう。「夜」に「繕る」を懸けるか。

◎はたいと 機を織るのに使う糸。

◎たてぬきしるく見ゆる月かけ 「経緯」は、機たていとの経たていとと緯よいと。夜であるのに、経と緯がはっきり見える、それほど明るい月影。

◎我道のさいかく、まことにきこえたり 「我が道」は、作者の紺搔としての職能。「さいかく」は「才学」。「才

「覚」とも書くが、東博本では、「左、瓦葺の才学、なほ入りたたぬ月なり」(四十四番、瓦焼・笠縫、判詞)、「左歌、……二首ながら鯉を詠める、才学なきに似たり。せめて餌の饅頭の脹るらむは、才学少し侍り」(五十七番、庖丁師・調菜、判詞)、「左哥、恋に茶の寄せをもとの侍ること、才学少しなし」(六十九番、華嚴宗・俱舍宗、判詞)と、「才学」に統一されている。また、これらの例からも分かるように、「才学」は機知、工夫を意味し、具体的には、歌を詠む上でのそれをいう。ここは、紺搔の道を月の歌に詠み込んだ、その巧みさがよく分かる、というのである。当然のことながら、職人の歌は、いかにそれぞれの職能を詠み込むかが大事なところである。「左右ともに、我道を深く言ひ立てて、しかも月をもてなせり」(十九番、紙漉・賽摺、判詞)、「左右ともに、その道確かなり」(三十番、立君・図子君、判詞)、「左も右も、詞柔がざるは、道に叶へり」(四十七番、文者・弓取、判詞)、「道によりてかしくければ」(四十八番、右、曲舞々、判詞)、「左右ともに、我道の姿を借りて恋を寄せたる心ばせやさし」(五十番、田楽・猿楽、判詞)という判詞は、みなそのことを言う。職人のそれぞれの道(職能)が、すなわち歌の道に通じるとする建前があった。序文の語注参照。

◎月のことなるをほめたり 月が殊に美しいことを褒め讃えている、その点がよい、というのである。歌合の月の歌では、月を賛美することが要請されている。

◎はた絲は心ひくすぢ也 「心引く」は人の心を引きつけること。「筋」は、ある方面の事柄。すなわち、「機絲」の歌に、より心が引かれる、というのである。「筋」という言葉を用いたのは、「機絲」の縁による。五十九番左、麻売の月の歌の判詞に、「麻絲の哥、心引く筋なり」と言うのも同様。

◎しかま川(飾磨川) 歌枕。播磨国飾磨(現兵庫県姫路市南部)の川。現在の市川の支流、船場川であるという(吉田東伍『大日本地名辞書』)。飾磨地方は古来褐の産地として有名で、そのことは、「いとせめて恋しきときは播磨なる飾磨に染むるかちよりぞ来る(読人不知)」(金葉集二度本、異本歌)、「我が恋はあひそめてこそ勝りけれ飾磨の褐の色ならねども(道経)」(詞花集、八、恋)などのように、恋の歌にも多く詠まれて来た。

◎あふ瀬もいつとちぎらぬに 川の水の「合ふ瀬」に男女の「逢ふ瀬」を懸ける。いつ逢おうと約束したわけでも

ないのに。

◎あながちひとのこひしかるらむ どうして、ひたすらあの人が恋しいのであろうか。「あながち」に飾磨の「裾」を懸ける。この懸詞も、「播磨なる飾磨に染むるあながちに人を恋しと思ふころかな〈曾根好忠〉」（詞花集、七、恋）、「播磨なる飾磨に作る藍島いつあながちの濃染めをか見ん〈信実〉」（新撰和歌六帖、六、あゐ）などの歌に用いられて来た。

◎おりはつる 明暦板本は「おりはづる」とするが、「織り果つる」であろう。

◎しづはたおひ（倭文機帯） 麻などの繊維で粗く織った粗末な帯。藍染めの対象が倭文機帯である必然性はなく、むしろ、专业化した紺搔にしては、不自然であるが、ここは、「倭文」、「倭文機」、「倭文機帯」が、しばしば歌材とされて来た伝統に従ったのである。

◎今はとていつうちとけてあひみそめまし 帯を「解く」に、男女が「打ち解く」を、「藍」、「染む」に、「相見初む」を懸ける。ともに、恋の歌でしばしば使われる技法。帯を織り上げて、今こそは藍で染めよう、というように、一体、いつになったら恋しい人と打ち解けて、相見初めることが出来るのであろうか。わが恋は、始めは万事よろしく進んでいても、さていよいよよとなると、肝心のところでうまく行かない。

◎ただ一しほそめよとおほせらるる 「ただひとしほ」の項参照。なお、この言葉は、『近世職人尺絵詞』に、そのまま用いられている。

◎あこやう 「吾子」は、大人が子供に対して、親しみを込めて呼び掛ける言葉。「やう」は、白石本は「よ」、忠寄本は「よ」を消して「やう」とするが、いずれにしても、呼び掛けに用いる間投助詞。ここは、自分の子供を呼んでいるのであろう。

◎くだ〔管〕機の緯を巻きつける道具。これを梭に嵌め込んで緯をやる。

【絵】

紺搔は、桂巻をし、小袖の裾をからげた女性が、染料に漬けた布を壺（瓶）から引き上げようとしているところ。

手前にもう一つの壺がある。白石本、忠寄本は、この手前の壺は描かず、また、白石本、忠寄本、明暦板本、類従本はいずれも、画面の關係で、壺の右部分を描いていない。染料の入った壺は、一定の温度を保って染料の醗酵を促すため、首部を残して土中に埋め込まれている。延享板本では、一方の壺の輪郭が長く下方に延びており、壺全体が地上にあるように見えるが、これは誤写であろう。なお、吉田光邦氏は、類従本の絵によって、「藍の瓶が埋めこまれず、地上にならべておかれたことは古態である」(『日本技術史研究』伝統 二、職人技術の変遷 一、七十一番歌合 凶私解)とされ、遠藤元男氏も、同じく類従本の絵を掲げて、「中世の紺搔は、瓶(甕)は地上に置いてあり、……夏期三カ月間の気温による自然醗酵による藍建であったという(『天半藍色』)と解され(『近世職人の世界』第九章、近世職人史話、二五)、その他にも同様のことを述べたものがあるが、類従本の壺の輪郭は首部しか描かれていず、また、女の腰を屈めた姿勢からしても、壺は、東博本と同じく、土中に埋められていると解するのが自然であろう。ちなみに、十二番本『東北院職人歌合』の諸本の紺搔の絵でも、壺は土中に埋められている。

機織は、束ね髪、筒袖姿の女性が、機を織っている。機は地機(蹠機)と呼ばれるもの。左手に箴を持ち、右手で梭を通しているところ。経を上下に分ける綜統は足に絡ませた綱で操作している。後方に使用後の管十数個と経を巻いた甕がある。手前の竿は、機を仕立てるのに使う道具か。明暦板本、類従本にはこの他、糸を巻いた管が二つ描かれている。

【参考】

○あらしの我が屋造りは杉の門身の材木を人に売りつつ

(三十二番職人歌合、二十八番左、材木売)

材木売の歌、紺搔の白袴などいふたぐひなるべし。

○衣織る糸も御調の捧げ物

〈素阿〉

(文和千句、二)

四方に通ふ道のたてぬき

○機織る箴のせばきはたばり

〈救済〉

(紫野千句、五)

麻布のいとまなくなく袖濡らし

注解『七十一番職人歌合』稿(二)

○ 夏過ぎぬ鳴く蟬の羽の薄衣
をりはへたるは賤が機物

〈成阿〉

(同、九)

○ 下萌えははや藍染めの春の山
霞めば色もおりからの空

〈忠貞〉

(初瀬千句、八)

○ 市に飾磨のかち人ぞ行く
あひそめん縁えんじもなきに名の立ちて

〈生阿〉

(文安月千句、九)

○ 市人の払ふ衣えんじに雪落ちて
飾磨のかち路寒き川風

〈行動〉

(文安雪千句、七)

○ あひそむる心の色も深き夜に
飾磨のかち路急ぐ朝市

〈賢盛〉

(宝徳四年千句、六)

○ 夏引きの麻の芋環手に繰りて
織る機物のいとも暇なし

〈忍誓〉

(享徳千句、三)

○ 色もすさまじ西河の水
あひそめし心のたれに移るらん

〈宗砌〉

(同、十)

○ 渡らじよ色にや染まむ漆川
ぬればぞ夢にあひ摺りの袖

(異体千句、二)

○ 恨むる節ぞ人に尽きせぬ
夏衣織る麻糸を繰り返し

〈宗祇〉

(熊野千句、五)

○ 賤が庵の物せはく見ゆ
あはれにも細布織れる機立てて

〈長敏〉

(河越千句、二)

○ この君の、かしこき世ぞと夕波に、声立て添ふる、機はたおの音、錦を織る機物の内に、相思あひまの字をあらはし、衣擣う

砧の上に、怨別の声、松の風、または磯打つ波の音、しきりにひまなき、機物の、取るや呉服の手繰の糸、わが取る
はあやは、踏木の足音、きりはたりちやう、きりはたり、ちやうちやうと、悪魔も恐るる、声なれや、げに織姫の、
かざしの袖 (謡曲、『呉服』)

○藍花は窄うだか、何染めうとて、狩袴染めうとて、解いては縫うたり、染めて乾された播磨の書写の紺摺、狩
袴を搗ちまに染むれば下品な (田歌草紙) (なそたて)

○いいそめし日より心をつくすかないつあひそめてうちはとくべき めづくし

○彼らの間では、染物師の技術も大変普及しており、かつすぐれている。なぜなら、絹や木綿や亜布の布をさまざま
まな色で染めるばかりでなく、それがどんな色であろうとも、その地色の上いろいろな色彩のさまざま花模様を
散らしておくのが一般の慣わしだからである。 (日本教会史、二卷三章)

○またシナにおけると同じように、日本人はさまざま花や鳥その他のものを、絹のいろいろな反物に織り込む技
術を持っている。そして都 Miyao の都市だけで絹の織機が五千あり、そこでこのような反物が織られている。また
彼らの衣服は限られた寸法で作られているので、その反物は絹のものでも、また絹くわくくずく〔紬つむぎ〕のものでも、木綿のも
のでも、亜布のものでも、すべてちょうど一人の衣服を作るだけの、一定の寸法になっている。そのため、われわ
れの間におけるようにコーヴァード〔日本の尺に当たる〕で売ることとはしないで、反物のままで売られる。 (同右)

五番 繪物師 車作

【職人尽】

〔十二番本 東北院職人歌合〕 八番右 繪物師
をけしりのおほろけならぬなかめこそもるもくるしき軒の月かけ

右の五文字、しなおかれて聞にく々みえ侍。又、月のもるをくるしとは、いかやうによそへられたるにか、心得かたく侍。持と申へし。

おしきひく杉のまき板ふししけみよこめをもせてあふよしも哉

右の五文字、ことの外に品おかれて、上下かきあはず侍り。ふるき人も、めのわらはへのかふしと哥の五文字とはなたらかになれ、とこそ申て侍れ。仍左勝とす。

〔飛鳥井雅康 職人歌〕 八番右 檜ものし

くみたくむおけなる水に影見れば月をさへこそまけいれてけれ

〔伝鳥丸光広作 職人歌合〕 檜物師 春ごとに花見を急ぐ檜物師の歌の心は題にこそあれ〔吾吟我集〕 寄車恋 軋まする人の心は破れ車わがままにしも引くに引かれず / 職人 檜物師の曲ぐるをも見よ人心掬へてこそは中まろくなれ〔古今夷曲集〕 題しらず 檜川のはたに生ひたる榊桜散るもぞ花のとち目なりけるへ読人知らず〔長崎一見 職人一首〕 六番左 檜物屋 散る花をいさ綴じとめん榊桜利を檜物屋が曲けてなりとも 左の歌、利を檜物屋が曲がりたる心ほど現れて、まさめには聞こへず。いたいたしくこそ侍れ。右の歌……奇妙奇妙。〔後撰夷曲集〕 寄車尺教 因果早うめぐりくるまの我からと知らでも悪を作る身は憂し〔行順〕〔人倫訓蒙図彙〕 檜物師 一切の木具、曲物、造物、鳴台等、杉、檜、榎等を以つて造る。類所々に住す。 / 車作 昔、齊の桓公、車作り申せし、古語に伝へて書にあり。作るに秘事あるとかや。車作るは、輪木八枚、輻は廿四枚。雑車は、輪木七枚、輻廿一枚なり。作り手は京清蔵口久右衛門。〔狂詠犬百人一首〕 ちやんげ檜物士 朝夕に檜物士のわれ仕なふれどあまりになどか下手の搔敷〔用明天皇職人鑑 職人つくし〕 指物屋より檜物屋の、曲がらぬ木竹捻ぢ曲けて締めて底ひを月ぞ澄む〔今様職人尽百人一首〕 檜物屋 曲げぬれば綴ぢるものとは榊なれどなをいたつきの薄板の数「これは逆目かや。節を通せばよいが」〔野郎奴はとこへ行きおつた〕 / 車師 輪の中月日の形まわりの人こそ知らね廻る日もなし「堅い木だ。骨が折るはよいが」いか。堅い山からだに底見れば」〔職人尽発句合〕 檜物師 玉くしりて二見の月の白合子 / 拜賀の三室にて、あら忙しや」玉くしげ二見といふより月の白合子、よく続けたりや。……兄たり難く弟たり難しと言ふべし。 / 車大工 時雨るるや車造りが憂しと言ふ「車はめぐれど」時雨をあはれみ月を愛づるも人の様々にて、車造りが憂しと言ふ理聞こえて、取り回しの応ぜしものか。……左可勝。〔職人尽狂歌合〕 車造 ほろ酔ひて車造は足曳きの山姥桜巡りてぞ見る 左 下の句めつらしく侍り。右も……この境大方等しき中に、左、初め五文字いささか弱げに侍れば、右を勝と定め侍りつ。 / 車造 桜狩りささえを積みて車師の引き回し見る花の下幕 左、ささへを積むとは何に積みたるにか。ささへを掲げて、など言ふべくや。右、……勝と定めて侍

り。／ 檜物師 桜木の皮を扱ふ檜物師も花見に氣をほとつる日もなし 右の檜物師、常には胸を病む人にや。さらば、一服の山桜湯よく鬱結を開くべけれど、花の庭には言ひ出すべき詞とも覚へず。左増りて侍るべし。／ 檜物師 帰れとの異見を曲げて檜物師も丸に一日花に遊びつ なほ右の破子造、味はひ深く侍り。勝と申すべし。／ 檜物師 手業をもやめて眺めん三方を桜に綴ぢし小初瀬の山 左、三四の句に心を入れられたる、おかしく侍り。……左、論まなう勝たるべし。〔豊蔵坊信海狂歌集〕寄牛車恋 めぐりあはん契りも遅き身はつらしうしの車の我が思ひかな 〔近世職人尺絵詞〕「裸にて作り給へば、尾籠げの車とも云はなん」〔略画職人尽〕 蜘蛛の巣に止まる楔は蜻蛉とびの動かぬやうに巧む車屋

【本文】

五番

くみたむるおけなる水に影みれば

月をさへこそまけいれてけれ

こゝろしてくるまつくらむ秋の夜の

なかえの月のをそくめぐらは

左哥、月をまけいるゝ事、入月をねかふに似

たり。すこし心なきにや。右は、月をゝそくつくり

なさむといふたくみ、よくきこゆ。右勝にこそ。

あふ事はそれそとちめのさくらかは

かはかりとこそおもはさりしか

わか恋はくさひもさゝぬをくるまの

めくりあふへきたのみたになし

左、とちめの桜かはかはかりとつゝけたるさま、面

白くきこゆ。右、心はさもとときこゆるを、月の哥

くみたむる―〔類〕汲たむる おけ―〔類〕桶

まけいれてけれ―〔類〕曲いれてけれ

こゝろして―〔類〕心して くるま―〔類〕車 夜―〔類〕よ

左哥―〔類〕左歌 事―〔類〕こと ねかふ―〔類〕願ふ 似たり

―〔類〕ゝたり

ゝそく―〔忠〕おそく つくり―〔類〕造り

あふ事―〔類〕逢こと さくらかは―〔類〕桜かは

おもは―〔類〕思は

わか恋―〔類〕我恋 をくるま―〔白〕をくるに〔類〕小車

あふへき―〔類〕逢へき

つゝけたる―〔類〕続けたる

きこゆ―〔類〕聞ゆ きこゆる―〔類〕聞ゆる

にも恋の哥にも、めくるとよめり。ふところせは
きにゝたり。是は左勝侍へし。

◇ ◇

ひ物し

ゆおけにも

これはことに

大なる。

なにのために

あつらへ

たまふやらむ。

車つくり

ひりやうの

わとて、よく

つくれと

おほせ候。



ふところ一〔類〕懐 せはき一〔類〕狭
侍へし一〔忠〕明〔類〕侍るへし

ひ物し一〔目〕〔類〕檜物し〔忠〕 檜物し
五番

ゆおけ一〔目〕〔忠〕ゆ桶

これ一〔目〕〔忠〕是

なに一〔目〕〔忠〕何

あつらへたまふ一〔目〕〔忠〕詠給ふ〔類〕あつらへ給ふ

やらむ一〔尊〕〔目〕〔忠〕やらん

車つくり一〔目〕〔類〕車作〔忠〕車作
くるまづくり

わ一〔目〕〔忠〕輪

おほせ候一〔目〕〔忠〕仰候

【語注】

◎檜物師は、檜や杉の薄板で、桶などの曲物を作る職人。

車作は、牛車を作る職人。車作は以前の職人歌合には見えない。両者が番になっているのは、ともに木材で輪を作るからか。

るからか。

◎くみたむる…… 『飛鳥井雅康 職人歌』八番右は、初句「くみたくむ」。

◎くみたむる 桶を「組み撓むる」に、水を「汲み溜むる」を懸けるか。『飛鳥井雅康 職人歌』の「くみたくむ」

だと、「組み巧む」で、水を「汲む」との懸詞は成立しにくい。「くみたたくむ」から「くみたむる」に改作されたと考えてよからう。(ただし、檜物を作ることを「組む」というかどうかについては未考)。

◎おけなる水に影みれば「影みれば」の「影」は、これだけでは、自分の姿のように取れるが、次に「月をさへこそまげいれてけれ」とあるから、「月影」と取るのがよからう。桶の水に月影が映るといふ発想は、謡曲『松風』の、「さし来る汐を汲み分けて、見れば月こそ桶にあれ、これにも月の入りたるや、嬉しやこれも月あり、月は一つ、影は二つ満つ汐の夜の車に月を載せて、憂しとも思はぬ汐路かなや」からの連想か。

◎月をさへこそまげいれてけれ 檜物師は杉や檜の薄板を曲げて、桶などの丸い器を作る。ここは、職業がら月さえも曲げて桶に入れた、というのである。満月の円いのを、自分の手柄であると見做したのであろう。「曲げ入る」には、無理やり入れる、との意もあるかも知れない。

◎こころしてくるまつくらむ 心を込めて車を作らう。

◎秋の夜のながえ「秋の夜の長」に車の「轆」を懸ける。「轆」は牛車などで、車軸の左右から前方に長く突き出た二本の棒。

◎ながえの月のをそくめぐらば 長夜の月がゆっくり廻るならば。「めぐる」は、月が空を渡ること。また、「めぐる」は「車」の縁語。後述、「めぐりあふべきたのみだになし」の項参照。

◎月をまげいる事、入月をねがふに似たり「入る月」は、西に沈む月。「月を曲げ入る」というと、月が沈むことを連想してよくない、というのであろう。歌合の月の歌は、月の盛りを詠むべきものとされていた。一番「哥合には、かたぶく月、あやなくきこゆ」の項参照。

◎月をそくつくりなさむといふたくみ 車を念入りに作るために、月がゆっくりめぐることを喜ぶ気持ちをうまく表現した、というのであろうが、意味が取りにくい。

◎あふ事はそれぞれどぢめ「閉ぢめ」は、物事の終わり。今にして思えば、逢うことはそれ(かつて逢ったその時)が限りであった、というのである。恐らく、一度切りの逢う瀬であったのであろう。あるいは、そのような体験をも

とに、「会うは別れ」という諺と同じ意味で）逢うということはすなわち閉じめなのだ、という感慨を述べたのだ、とも取れる。「閉ぢめ」に曲物の「綴ぢ目」を懸け、「綴ぢ目のさくらかば」と続く。なお、山本唯一氏はこの歌を、「男女が逢うことは、それぞ両者を心身ともにしっかりと結びつけるといふことである。檜の曲物の桜樺がそうであるように、とは兼て聞いてはいたが、これほどまでそうであるとは思わなかったことだとの意であろう。肉体的に結ばれたあと、一段と愛情が深くなった体験をもとにしての作である」（『中世職人語彙の研究』）と解釈される。

◎さくらかば〔桜樺〕 桜の甘皮（外皮の内側の薄い樹皮）。曲物の綴ぢ目に用いる。「さくらかば―かばかり」と続く。

◎かばかりとこそおもはざりしか これほどはかない恋とは思ってもいかなかったのに。

◎わが恋は 「わが恋は……」という形式は、恋の歌の典型的なパターンの一つ。「わが恋はみ山がくれの草なれやしげさまされど知る人のなき〈小野美材〉」（古今集、十二、恋）のように、普通、第二三句に、恋を比喩するものを置き、第四五句に、そのもののようにわが恋はしかじかだ、と言う。当職人歌合でも、他に、第六番右、酒作、第七番左、挽入売、第二十六番右、経師、第三十七番右、素麵売、第四十五番左、鞘巻切、第五十三番左、葛籠作、第五十五番左、臺目割、第六十三番右、相撲取の恋の歌がこのパターン。

◎くさびもさゝぬをぐるまの 白石本は「をくるにの」とするが、誤写であろう。「楔」はここでは、車輪を車軸に固定するための楔。「小車」は牛車のこと。「楔も刺さぬ小車」はうまくめぐる（回転する）ことができなないので、次の「めぐりあふべきたのみだになし」の序詞となっている。

◎めぐりあふべきたのみだになし 恋しい人に、今逢えないばかりでなく、いつの日にか廻り合えるという望みさえもない。「車」と「めぐる」、「めぐりあふ」という言葉との取り合わせは、「早き瀬に立たぬばかりぞ水車我も憂き世にめぐるとをしれ〈行尊〉」（金葉集九、雑）、「山本や木の下めぐる小車の簾動かす風ぞ涼しき〈公蔭〉」（風雅集四、夏）、「法のため我が身をかへば小車の憂き世にめぐる道や絶えなん〈覚実〉」（風雅集十八、釈教）、「君が代にまためぐりあふ小車の錦ぞ神の手向けなりける〈小槻匡遠〉」（新千載集十、神祇）、「小車の我が跡見ゆる朝水／二つの

川ぞめぐりあひぬる〈家尹〉(文和千句、一)、「九重に重荷を運ぶ淀車／世に從ひてめぐるあはれさ〈專順〉」(新撰菟玖波集)など和歌や連歌ばかりでなく、「竹田河原の淀車、夜深く賑る声すこし、浮きてや浪にめぐらん、世を宇治川の水車」(宴曲『車』)、「世をばげに、何か恨みんもとよりも、因果のめぐる小車の、やたけの人の罪科は、みな報いぞといひながら」(謡曲『藤戸』)、「身はなほ牛の小車の、めぐりめぐり来ていつまでぞ」(同『野宮』)、「浮き世をば何とかめぐる車僧まだ輪の内にありとこそ見れ」(同『軍僧』)、「情の文は小車よ、情の文は小車よ、ただ失ふて適うまじ、めぐりあふまで」(虎明本狂言『花子』)、「宇治の川瀬の水車、なにと憂き世をめぐらふ」(閑吟集)など、広く歌謡等にも見られる、極めて一般的な修辭であった。それを逆手に取って、「楔も刺さぬ小車―めぐりはぬ」としたところに、パロディとしての面目がある。

◎心はさもときこゆるを 歌の意味はなるほどと納得できるが。

◎ふところせばき 「懐狭し」という用例は、他の文献では管見に入らないが、思慮が浅く、才知に欠けることを言うのである。この場合には、車作が、月の歌にも恋の歌にも「めぐる」という言葉を用いた安易さを批判していることになる。第七番判詞でも、油売の月・恋の歌に対して、「二首ながら第三句に、油売と置ける、懐せばく聞こゆ」とあり、五十七番判詞では、この言葉は用いられていないが、庖丁師の月・恋の歌に対して、「庖丁には魚も鳥もいくらも寄せありぬべきを、二首ながら鯉を詠める、才学なきに似たり」と同趣旨と思われる批判をしている。虎明本狂言『今参』で、大名が、「きやつが腹中はまだ広さうな」と喜んで、今参に秀句を続けさせる件の、「腹中が広い」は、丁度これの逆の意味かと思われる。なお、五十二番(刷師・疊紙売)の恋の歌の判詞にも、「左右ともに、歌仙の哥とも見えず。懐せばし」とある。

◎ゆおけにもこれはことに大なる 「湯桶」は入浴用の桶。ここは、言うまでもなく、曲物の桶。注文を受けた桶は、湯桶にしてもよほど大きすぎると、不思議がっているのである。曲物の桶は弱いので、あまり重いものは入れられない。こんな大きな桶を作つて、何を入れるのか知らないが、大丈夫だろうか、といった気持ちで込められていよう。なお、曲物桶に対して、板を並べ合わせて撞で締める結桶は、鎌倉後期ごろから見られ、中世の終わりには、

酒、味噌、醤油などを醸造する大きな結桶が作られるようになった（宮本常一『絵巻物に見る日本庶民生活史』六、工匠と民具）。

◎「びりやう」〔檳榔〕「びらう」とも。檳榔毛の車のことで、檳榔の葉で車の箱を覆った高級な牛車。太上天皇、親王、摂関、上卿などが用いた。

【絵】

檜物師は、烏帽子、直垂袴姿。諸肌脱ぎで、右手に小刀を持ち、薄板を曲げるために筋目を入れている。手前に別種の小刀、砥石と砥台、仕上った曲物二つ。

車作も、烏帽子、直垂袴姿で、木槌と鑿で輪木の一つを作っている。これを組み合わせて車輪を作る。手前に仕上がった車輪。棒状の物は、車輪の輻か。白石本、忠寄本では、その中の一本は黒く塗られている。

【参考】

○ 軋るてふ車工はこれかとよ

心めぐらす人の事業ことわざ

〈良珍〉

（文安月千句、八）

○ 車を作る椎の木、車を作る椎の木、船を作する楊柳

（謡曲『金札』）

《シイノ木ハ、車ノ材木ニヨキカ。文選ノ序ニ、椎輪ハ大輅ノ始メタリ、トアリ。コレハ、ヨコ椎ノコロブヲ見テ、車ノ輪ヲ作り始メタト云フコトナリ。椎ヲ椎トヨムコト、日本ノ義ナルガ故ニ、日本ノ俗アヤマリテ、椎ノ木ニテ車ヲ作ルト云フカ。

（うたひせう）

○ 惣じて車は三寸の楔をもつて千里を走ると申し、人間は三寸の舌をもつて五尺の身を失ふと申すが、……

（謡曲『丹後物狂』）

【職人尽】

〔飛鳥井雅康 職人歌〕 七番右 なへや

名にしおへは秋のうちなるはりまなへふたゝひにゝる月をみる哉

〔吾吟我集〕 寄酒恋 思ひ乱れ色に出にけり我が恋は酒にえふかと人の問ふまで / 寄鍋恋 あだ人の筑摩祭に被くてふなべての數に入る我ぞ裏き / 市 尋ね来て 誰もしるしの杉の門三輪の市屋の酒林とは 〔古今夷曲集〕 市 杉立てる門をしるしに上戸ども寄りたかり飲む三輪の市酒へ独友 〔後撰夷曲集〕 寄酒恋 なさげあらばとくりと闇に寝もしん着物とは千話をしつつもへ正盛 付けざしは薬酒とぞ申すべき恋の病のかるくなりつつへ知義 / 寄酒恋 世の中は何に譬へん麻地酒甘きやうにて辛き宮みへ宣就 / 酒屋 よき酒ぞ買ひにもござれ我が宿は宿よしたか 〔入倫訓蒙図彙 酒屋 或る書に云はく、寄酒恋 よひの間にちくとも来よこのおなさけを受け一盃飲むよしもがなへよししたか 〔人倫訓蒙図彙 酒屋 或る書に云はく、寄酒恋 よ摩訶婆利夫人、始めてこれを作る。其の年癸酉なるがゆへに、三水に酉を書くなり。また云はく、堯の代に、継子を憎む母の、飯に毒を入れて与へけるを、其の子これを知りて、杉の三本ある所へ捨てけるを、雨露の滴りにてわきてよき味となる。これ酒なり。夏の禹王の臣下これを作る。禹王聞こし召して、痛ましいかな、末代この味に耽つて、人をして迷乱すべし、と嘆き給へり。聖人の一言神のごとしとかや。京、大坂、奈良、伊丹、鴻池等、名酒品々にあり。酒造る男を杜氏、漉酌といふなり。〔華江葉〕 寄酒恋 ぴんとしてまたどこやらは甘口でなるよでならぬはおなさげぞなやへ稔雪 〔職人尽 癸酉句合〕 酒造 下戸ならぬおのこによけれ夕涼み 兼好の、下戸ならぬこそよけれと書きしを、酒造が得手に夕涼みの風情をかしけれど、……持とす。〔職人尽 狂歌合〕 酒造 同 造りなす酒はさもなく花に酔ひて日の入ることも知らぬ木の本 猿に酒醸せし株は取られし花見て事のたる割りもあり 左、下の匂いみじく興あり。右、猿丸に酒屋取られたる、定めて故ある古事なるべけれど、管見の判者聞き知り侍らねば、まづやすく聞こえたる左の方を甲の坐に据ゑ侍りつ。 / 酒造 み吉野の春に吞まれてうかうかと花に酔ひたる酒造り人左 酒造りけしうは侍らねど、……しばし趙邪卿（右）をもて歩兵校尉（左）が上に置きて侍り。〔江戸職人歌合〕 十七番左、酒屋 都人こよひ河原に立ち出でてかものす山の月や見ららむ 右申云、かものす山、何事にか。左陳云、酒の名なり。右又申云、さらば伊丹にこそあらめ。都人とはいかが。判云、かものす山は伊丹なれど、都の加茂に取り成して詠まれたること、子細侍らじ。武蔵のみよしのを、花散るころのと、大和のみ吉野に言ひ成し、陸奥の白川を、関まで行かぬと、山城の白川に詠めるたぐひ、常に侍るにや。右の歌、……勝といふ文字を付け侍るべし。恋ふるとも今はた逢はん三河酒胸痛きまで何思ふらん 左右共不難申。判云、三河酒胸痛きまで、をかしよう続けられて侍り。尤為勝。〔略画職人尽〕 石高も去年より今年おほ桶に梯子登りもして作る酒 〔宝船桂帆柱〕 酒屋 正直を一本木なる酒店の榮へは日々に升ばかりなり 〔かみやの菊、かじまのうろこ、かもだの嵐山は上物〕 〔難波職人歌合〕 上 八番左、酒屋 空晴れて見る目の外に嬉しきは月の円居の杯の数 右の方人云、月見に酒の多

く売れなむことを喜ばれたるは、いやしき心現れて、いと聞きにくし。左方答、是則ち人の真心にて、その真心を言へること誠の歌なれ。判に云、月のくまなきを嬉しむにつけて、家の栄えをも思はれたる真心、また、(右歌) ……ともに人とあるもの習はしといふべし。左右の方人達の論は強言なるべし。それにとりて、歌の姿は、詞といひ心といひ、右の方、立ち勝りて聞こゆ。勝と言ふべし。

【本文】

六番

名にしほへは秋のうちにもはりまなへ
ふたゝひにゝる月をみるかな

あちさけのかすみしそらにゝたるかな

あま氣のつきのしほりいてつゝ

左は、ともに八九月二たひの名月を

よくよせて、なへふたとつゝけて、しかも

月をほめたり。右は、秋の明月にむかひ

て、春をおもひいつるのみならず、雨氣を

さへ詠する事、風情をうしなふにゝたり。

仍、以左為勝。

うらめしやつくまのなへのあふことを

われにはなとかかさねさるらむ

我恋はしのふとすれとさかへいし

くちこそつゝめ色にいてつゝ

名にしほへは〔忠〕〔明〕名にしおへは〔類〕なにしおへは

秋〔尊〕秋 はりまなへ〔類〕播磨鍋

ふたゝひにゝる〔目〕ふたゝひにゝる かな〔類〕哉

あちさけ〔類〕あち酒 かすみしそらにゝたるかな〔類〕霞

し空に似たる哉
あま氣〔尊〕〔類〕あまけ つき〔類〕月 いてつゝ〔類〕出

つゝ

ほめたり〔類〕褒たり

おもひいつる〔類〕思ひ出る

事〔類〕こと うしなふ〔類〕失ふ

つくま〔類〕筑摩 あふこと〔類〕逢こと

われ〔類〕我 らむ〔類〕らん

しのふ〔類〕忍ぶ さかへいし〔類〕さか瓶子

くち〔類〕口 いてつゝ〔尊〕いてつゝ〔類〕出つゝ

左の哥、まことに撰集などに入たり
 ともはちすや侍らん。右は、いさゝかたは
 ふれ哥也。仍、左可勝。

なへうり

はりまなへ

かはしまへ。かまも

さらうそ。ほしかる

人あらは、仰られよ。

つるをもかけてさつ。

さかつくり

まつさけめせかし。

はやりて候。うす

にこり。



左の哥—〔類〕左歌 まことに—〔類〕誠に

はちす—〔類〕恥す

也—〔類〕なり

なへうり—〔白〕〔類〕鍋売〔忠〕
六番女 鍋売

はりまなへ—〔白〕〔忠〕幡ノ鍋

かはしまへ—〔白〕〔忠〕類かはしませ かま—〔白〕〔忠〕釜

さらうそ—〔明〕さぶらうぞ〔類〕さぶらうそ

仰られよ—〔白〕〔忠〕ヒ仰よ

さかつくり—〔白〕〔類〕酒作〔忠〕酒作まつ。

まつ—〔明〕〔類〕先

うすにこり—〔尊〕うすにこりにて候〔白〕〔忠〕うす濁にて候

〔明〕うすにこりにて候〔類〕うすにこりも候

【語注】

◎鍋売は、月の歌、絵、画中の言葉からして、ここでは、金属製の鍋を売る商人らしい。鋳物師の流れを汲む者と思われる。鍋売は当職人歌合以前には、『飛鳥井雅康 職人歌』以外には見えないが、東北院職人歌合に鋳物師があり、『飛鳥井雅康 職人歌』の鍋屋は、十二番本の鋳物師に対応している。

酒作は古くは、女性の仕事とされていた。室町時代にはすでに、大寺院や大規模な造り酒屋での酒造が盛んであつ

たが、なお家内工業的には、女性が酒を作る場合が多かったと思われる。狂言『河原太郎』、『伯母が酒』の酒作も女性である。酒作は、以前の職人歌合には見えない。いささか意外な気がする。鍋売と酒作とは、ともに飲食に関わること以外、特に関係を見出せない。

◎名にしほへば……『飛鳥井雅康 職人歌』は、第二句「秋のうちなる」

◎名にしほ〔負〕へば 『飛鳥井雅康 職人歌』および忠寄本、明暦板本、類従本の「おへは」が正しい形。「名にしほ〔負〕へば」は、名が体を表していること。ここでは、播磨鍋の蓋の「ふた」という語が、その音の通り、「ふたたび」という内容を表していると見做されているか。下の「播磨鍋」がどのような鍋であったか未考であるが、あるいは、この「播磨鍋」という言葉の中に、「名にしほ〔負〕」ものがあるのかも知れない。

◎秋のうちにも 「ふたゝびに」に続く。『飛鳥井雅康 職人歌』の「秋のうちなる」は、「はりまなべ」に続くことになり、やや意味が取りにくい。

◎はりまなべ 播磨国飾磨郡野里（現兵庫県姫路市北部）産の銅製の鍋か。『毛吹草』に「播磨 野里鍋」とある。野里は鋳物師の村であった。「播磨鍋」という言葉は、近世後期には、「尻が早い」に言い懸けて、浮気女のことを意味した用例があり、「播磨鍋」は、薄手で物が煮えやすかったと思われるが、当職人歌合当時から、そうであったかどうかは、未考。

◎ふたゝびにゝる月 鍋の「蓋」から、「二度」と言い懸ける。「二度にゝる月」は、判詞に「八九月二たびの名月」とあり、八月と九月の二度の名月をいうのであろう。『洞院撰政家百首』の「待ちかぬる向かひの山の木の間より二たび出づる秋の夜の月へ教美」は、これを詠んだものか。時代が下るが、浄瑠璃『用明天皇職人鑑』に、「軒の燈籠二度の月、菊の節句や年の暮れ」の例がある。「にる」は「似る」か。やや意味が取りにくい。「にる」に、「煮る」を懸ける。播磨鍋が煮えやすいものであったとすれば、「二度に煮る」は、一回分の燃料で二度煮ることが出来る、ということかも知れない。鈴木業三氏編『日本職人辞典』は、「二度とも名に負う月見であり、満月だから似ているのも当然。播磨鍋は熱しやすく冷めやすいから、煮直すことが多いのを二度煮ると言い掛けている」とする。

◎あぢぎけ 上代語「味酒」の誤読から生じた語。上等の酒。

◎かすみしそらにたるかな 「霞みし」に味酒の「香」を懸けるか。「霞む」は、濁り酒の白く濁っていること、あるいは、薄濁りの黄味を帯びていること? 「うすにこり」の項参照)をいうのであろうか。または、やや時代が下るが、『日葡辞書』に、「Casumi: 霞、または、蒸気」また、酒や酢などを暖める際に出る煙、あるいは、湯気 Sageno casumiga taicu. 酒を暖める際に、その湯気が立ちのぼる。」(邦訳日葡辞書)とあり、当職人歌合の場合も、酒の稠をしたときに湯気が立つことをいうのかも知れない。いずれにしても、味酒が霞んでいるように霞んでいる空の様子だ、というのであろう。なお、「霞」は、「しかはあれども、僕霞を酌む一芸を得たり。野亭をのづから陶家の富をなきむ」(月庵醉醒記、序)、「あはれ、霞を汲まん杯もがな」(仮名草子『ねごと草』)のように、酒の異称として、あるいは、「情(名酒)なく搾らせて飲む身の果てやつるには野辺の霞とならまし」(上井覚兼日記、天正十三・四・五)のように、酒の縁語として用いた例もある。

◎あま気のつきのしほりいでつ、「雨氣」に「甘げ」を懸ける。「搾る」は酒の縁語。醪を濾過すること。雨模様
の月が搾り出すように出てくる、というのであろう。

◎ともに八九月二たびの名月 「ともに」は、八九月二度の名月を両方ともに、の意か。やや意味が取りにくい。
「八九月二度の名月」は、八月十五夜と九月十三夜の二度の名月。

◎よくよせて「寄す」は、ある事柄を別の事柄に関連づけること。ここは、鍋の「蓋」から「二度の月」を引き出して、月を巧みに鍋に関連づけたことをいう。

◎秋の明月にむかひて、春をおもひいづる 「明月」は明るい月、つまりは名月。歌合の月の歌は、秋の明月を詠むべきものとされてきた。にもかかわらず、秋の明月に向かって、「霞みし空」という春の景を思いついた点がよくない、というのである。

◎雨気をさへ詠する事、風情をうしなふにたり その上、雨気を詠んだことは、風情をおち毀すようなものだ。
歌合の月の歌は、月の美しさを褒め讃えるべきであるから、雨氣の月はよくないとされた。二十二番左、傘張の月の

歌でも「雨氣の月」の語を用いて、「月に向かひて雨氣を詠めり。哥合の故実なきにや」と非難され、三十四番左、医師の月の歌では、「筑紫病み(鬮) 雨氣の月の」と詠んで、「哥の病はなくて、腰の病あり」と揶揄されている。

◎つくまのなべのあふこと 「筑摩の鍋」は、近江国坂田郡入江村(現滋賀県米原町)の筑摩神社の祭礼で、女性が頭に被った鍋。それまでに交渉を持った男性の数だけ鍋をかぶり、数を偽ると神罰を受けるとされた。伊勢物語百二十段の、「近江なる筑摩の祭とくせなんつれなき人の鍋の数見む」の歌で有名。こゝは、伊勢物語の歌と同様、他の男達に対しては多情であるのに、自分に対してはつれなく当たる女を恨む。なお、鈴木棠三・川口公一両氏は、この歌を女の歌と取って、「その(鍋の)数の多いのも恥かしいが、この歌のように誰にも相手にしてもらえず、鍋を重ねるに至らぬのも恨めしい」(日本職人辞典)とされる。

◎われにはなかかさねざるらむ 逢うことを「重ね」に、鍋を「重ね」を懸ける。私ばかりにはどうして逢ふ瀬を重ねてくれないのであろうか。

◎さかへいじ 「酒瓶子」は、酒を注ぐのに使う器。瓶子。縦長で上部が丸く脹らみ、口が小さい。絵で、酒作の後方に二つ描かれているのがそれ。「我が恋は酒瓶子のようで……」と下の句に続く。

◎くちこそつゝめ色にいでつゝ 「口」に、酒瓶子の「口」と自分の「口」(発言)、「つつむ」に酒瓶子の口を「包む」と自分の口を「慎む」を懸ける。「色に出づ」は、外見に現れること、顔色に出ること。こゝは特に酒売の歌であるから、酒の縁もあって、「色に出づ」という言葉を使ったのであろう。酒瓶子は、口は封がしてあっても、外形からすぐに中身が分かる。そのように、わが恋は、他人を憚って口を慎んでいるのだが、思わず顔色に出してしまう、というのである。著名な「忍ぶれど色に出でにけりわが恋は物や思ふと人の問ふまで〈平兼盛〉(拾遺集十一、恋)を念頭に置いての作であらう。

◎撰集などに入たりともはぢずや侍らん 「撰集」は勅撰集。勅撰集に入っても恥ずかしくないほど優れた歌だ、という最高級の評価。勿論これは冗談である。次項参照。

◎たはぶれ哥 ふざけた内容の歌。歌合の判詞には、「左、弱げなり、右もざれ、歌なりとて、持と定められしも、

……」(承暦二年内裏歌合、三審判詞)、「右歌の、あしげ、かげなど思ひ寄りたるほど、たはぶれ歌なり」(若狭守通宗朝臣女子達歌合、一審判詞)、「左は、花に向かひていざさらばといひ、右は、山風を何とこのといへる心、ともにざれ歌の心なるべし」(千五百番歌合、百七十四審判詞)など、この種の批評がしばしば見られる。当職人歌合、四十五番(鞘巻切・鞍細工)の月の歌の判詞で「左は、いさゝかざれ哥に似たり」と評されるのも同じ。職人歌合は、歌合のパロディであるから、その限りで、本よりふざけた歌が詠まれるのであるが、しかしまた、パロディであるからこそ、建前上はあくまでも正統な歌合の歌と同じ格調を保っていなければならぬ。この歌はその点がだめだ、というのである。おそらく、恋の心を酒瓶子に譬えた奇抜さが問題とされたのであろう。左歌も、恋の心を鍋に託するという奇抜な技巧を用いてはいるが、これは『伊勢物語』に基づいているので、可とされたのだと思われる。この判定の仕方は、あるべき歌合の判詞として、取りあえずまっとうだと言えよう。もっとも、実際に左右の歌にそれほどの開きがあるかどうかは、実は大して問題ではない。一方を「撰集などに入たりとも恥ぢずや侍らん」と著しく褒め上げ、他方を「たはぶれ哥」と厳しく難じて、対比を強調したところが、いかにも正統な歌合の判詞らしくておもしろい。要は、こういう類の評を下すこと自体に意味があったのである。

◎かはしまへ、白石本、忠寄本、類従本は「かはしませ」。「しまへ(シマエ)」は、尊敬の助動詞「シム」(「シマウ」の転化した語)の命令形。室町時代末期の話言葉で用いられたらしい。湯澤幸吉郎氏は『室町時代言語の研究』九章五節で、「(サ)シモ」、「(サ)シム」を取り上げ、『勅規桃源鈔』以下の抄物から多くの例を引いておられるが、「(サ)シマエ」、「(サ)シメ」という二種の命令形の中、「(サ)シマエ」については、『四河入海』(大永七、天文三年編著)の他には、ほとんど見当たらないことを注意された。大塚光信氏も、『漢書列伝竺雲講桃源聞書抄』以下の抄物を調査し、各抄とも、命令形は、「シマエ(イ)」の転と考えられる「シメ」にほぼ転化しきっていることを明らかにされている(『抄物とその助動詞三』『国語国文35巻5号』)。さらに、鈴木博氏は、同じく『四河入海』であっても、伝本によって差があり、原初のおもかげを濃厚に持つ東福寺本で「シマへ」となっている箇所が、より整齐された両足院本では「シメ」に約音化され、また、「(サ)シマへ」が、「(サ)シマセ」に変わる傾向が見られることを

指摘されている（『四河入海』について―東福寺所蔵本と両足院所蔵本との比較小見―）国語国文35巻5号）。室町時代末期に一時「(サ)シマエ」が用いられたが、結局は「(サ)シメ」や「(サ)シマセ」に勢力を譲ったと見られよう。白石本以下に「かはしませ」となっているのは、この間の事情を反映したものか。なお、当職人歌合では、第八番右、筵打の言葉にも「豊島筵買うしまへ」という言葉が見える。わずかに二例から速断はできないが、播磨と豊島の近接性を考えると、あるいは地域による方言差があつて、それを反映しているのかも知れない。

◎かまもさらうそ 明曆板本「さぶらうぞ」、類従本「さぶらうそ」。「さらう」は、「さうらふ」の転化。鍋とともに釜も売っているのである。

◎ほしがる人 欲しい人という意味であろうが、「欲しいがる人」という言い方については、未考。

◎つるをもかけてさう 「鉉」は、鍋などの弓形の取手。サービスで鉉も掛けてある、というのである。一般には、鉉売が別にいたのであろうか。江戸時代末期の『今様職人尽歌合』には、「鍋の鉉売」が見える。

◎まづさけめせかし 「召す」は、「買う」の尊敬語。「ゝ召せ」は、商人が客を呼ぶ際の常套句。先ず酒をお買いなさいよ。この言葉は、左の鍋売に対抗して言うようにも取れる。そうだとすれば、ここは市のような場を想定しなければならぬ。

◎はやりて候 「はやる」は、商売が繁盛すること。評判がよい酒ですよ、と宣伝しているのである。

◎うすにこり この後に、尊経閣本、白石本、忠寄本、明曆板本は「にて候」、類従本は「も候」とある。東博本は誤脱か。これだけでは、やや不自然である。「薄濁り」は、濁り酒と清み酒との中間で、醪を半ば濾過するか、または、半ば滓引きした酒かと思われる。天理図書館蔵『鼠の草子』断簡に、南都酒、濁り酒等と並んで、「うすにこり」が見える。ただし、『四河入海』に、「サテ酒熟シテハ、其色益々トシテ、ウスニ、コリテ有ソ」(十三、二)とあり、『時代別国語大辞典 室町時代編』の「うすにこり」の項は、「……特に、十分に発酵して黄色味を帯びた酒をいう」とする。一方、同じく『四河入海』に、「(半熟酒ハ)半熟ナル程ニ濁ソ。ヨウ熟セハ清ヘキソ。酒名ニ、鵜児黄ト云ソ。其ヲ鵜黄ト云ソ。此方ニ云山フキ色ノ酒ト云類ソ。ウスニ、コツタルヲ云ソ」(七、一)という例もあり、こ

の「山吹色ノ酒」が「薄濁り」であるとすれば、十分醱酵していない酒をいうことになる。なお、当職人歌合の絵では、酒は黄色く彩色されている。

【絵】

鍋売は、折烏帽子、直垂袴姿で草鞋を履き、左手に手取鍋を提げ、右手で客を招いている。手前に三つ重ねた鍋と別に今一つの鍋。鍋はいずれも鋳物のように見える。

酒作は、頭巾、鉢巻をし小袖の上に打掛を着ている。前に、酒の入った結桶。酒は黄色く彩色されている。類従本は、桶の中の酒を描き落としている。手前に今一つの蓋をした酒桶。後ろに酒瓶子二つ。

【参考】

○春はまつ柳の桶をいざ結ひて麴花をも目に上げて見む

(三十二番職人歌合、十三番、左、結桶師)

○さし入るも味噌屋酒屋の糟法師声を替へても乞ふは茶代はり

(同、二十二番、右、虚妄僧)

○ 味酒の三輪の市人酔ひ伏して

濁れる世にはなど交じるらん

〈全誉〉

(紫野千句、一)

○ 作り置く三輪のあぢ酒取り向かひ

あまた飯屋の見ゆる朝市

〈龍忠〉

(宝徳四年千句、八)

○酒を商ふ商人の福貴ならぬはなきものを

(御伽草子『酒餅』)

○これは天の川 これは江川の上々 「江川の上々、さてもすぐれ申したり」

(鼠の草子)

○南都酒 片白 新酒 濁り酒 薄濁り 甘酒

(鼠の草子、別本)

○罷り出でたる者は、加賀の国のお百姓でござる。毎年大晦日さかいに持つて参り、元日に上頭へ上がる、実相坊の菊酒でござる。

(虎明本狂言『餅酒』)

○松の酒屋や梅壺の、柳の酒こそ優れたれ

(同)

○罷り出でたる者は、この辺りに住まる致す、浅鍋を商売致す者でござる。……今こそかやうの浅鍋を商売致すと

も、一の店を領じたらば、後には、金襴、緞子、緞金、唐織、錦などを商売致さうと存ずる。

(虎明本狂言「鍋八撥」)

○只今参るも別のこともござなひ。明日晴な客がござるが、よひ酒がほしうござるが、こなたの酒をおこひて下されうか。

(虎明本狂言「千鳥」)

○これは、この辺りに住まひ仕る太郎と申す者でござる。それがしが女どもは、今日河原の市じやと申して、早々酒を持つて商売に参つたが、夜前それがしが申すことは、よう出来たかあしう出来たか心みを致さうと申したれば、売り初めをせぬほどに明日参れと申したほどに、あれへ参り心みを致さう。

(虎明本狂言「河原太郎」)

○山一つあなたに、伯母を老人持つてござるが、ただ一人いらるる。この間、酒を商売いたさるるが、毎度参れども、終に酒を呉れらぬほどに、今度は乞ひ請けて食べうと存ずる。

(虎明本狂言「伯母が酒」)

○われらは食事をつくるのに、陶土製の深鍋や浅鍋を用いる。日本人は、鑄鉄製の鍋や器を用いる。

(日本覚書、六)

○われらの葡萄酒は、葡萄の実からつくる。彼らのは、すべて米からつくる。

(同、六)

○ヨーロッパでは、名望ある市民が、居酒屋で売られている(と同じ)酒を自分の家で売ることが卑しいことである。日本では、非常に名望ある市民が、それを売ったりみずからの手で計ったりする。

(同、六)

○われらの葡萄酒の樽は、かたく密封され、地面の割板の上に置かれる。日本人は、その酒を、大口の壺に入れ、封はせずに、その口のところで地中に埋めておく。

(同、十四)

○シナにも日本にもさらにこの東方には葡萄園がなく、葡萄の実で造った酒もないが、王国全土に共通した日本の酒はすべて米から造られる。その米を湯気に通した上で、それにその米から造られた一種の酵母を混ぜ、米の一定量に一定量の水を加え、いくつかの木桶または非常に大きなマルタヴァンの壺に入れるだけであって、その中で酒に変わるまで数日間発酵させる。それを亜麻布の袋に入れて、圧搾器のようなもので搾ると、しぼり糟は一つの大桶にある袋に残り、「その液は」大桶から容器に集められ、飲み物として、非常に適度で胃によい酒となる。……われわれ

の間に穴蔵があるように、彼らの間にもきわめて大きな穴蔵があり、たいへん大きくて奇怪なほどの大樽がある。それらの大樽は非常に高いので、上部から酒を取るには梯子でのぼって行く。
(日本教会史、一巻二十八章)

七番 油売 餅売

【職人尽】

〔吾吟我集〕 寄餅恋 逢ふて後なほ思ひつく砂糖餅ぢぎるにつけて味のよければ / 職人 世の業を心にしめて打つ槌に身の汗をさへ搾る油屋 〔後撰夷曲集〕 寄餅恋 思ひつこ心もちをば君にさて何かとりこにいふてちぎらん 〔正重〕 ちぎりなば丸くなりなんこの君の角菱もなき御心もち 〔惠立〕 〔人倫訓蒙図彙〕 油屋 大坂長堀、天満にて搾り、所々へ出す。京向き、江戸向きとてあり。昔は山崎を名物とす。今はなし。 / 餅師 大仏の前に住して、大仏餅と号してその名高し。老分の餅目三十九匁または四十匁あり。佐々餅、鶉餅、野郎餅等品々、道中の五文の餅、三十五匁あり。大坂難波橋筋大仏、江戸芝鶴屋。〔絵本御伽品鏡〕 面の餅屋 人あまた買ひに来て見るこの面は餅屋のために御福なりけり / 豕子糰 孫や子もみな息災にいのこもち弁才天の恵み尊や 〔狂歌乗合船〕 寄餅恋 乙御前の思ひつきたる尻餅をそろそろ撫でてひつちぎらばや 〔走帆〕 〔狂歌糸の錦〕 寄餅恋 ほとり口説きもやらでつき廻りあへさがされし手もちぶさたや 〔自全〕 〔狂歌種ふくべ〕 寄餅無常 ひとたびは盛りを見せし餅花も終ひに涅槃に熬りあひの鐘へわさ女 〔飯の世にあへて心を留むなよ無常の使ひくるみ餅じやに 〔狂歌活玉集〕 寄餅神祇酒屋をば守らんとある松の尾の神供に餅はきねが習はせ 〔契因〕 〔職人尽発句合〕 餅司 丸々と窓から覗く望の月 〔斗の餅を三つが一つに取りつければ、三升三合三升〕 三升、あぢむつこしや 餅屋が、丸々といふより、望の月と搦きこなしの拍子に、餠屋が……桂餠に点書くべし。〔職人尽狂歌合〕 餅練 若餅のころより待ちし山桜三月四月も花は咲かなん ……右、さしはへて花の盛りならんを願へる心おかしければ、しばし趙那卿 〔右〕 をもて歩兵校尉 〔左〕 が上に置きて侍り。〔江戸職人歌合〕 十七番右 餅屋 両国の河辺の月に浮かれ出ていく夜もちひぬ闇の枕ぞ 判云、……右の歌、いく夜もちひぬ闇の枕ぞ、いしくも言ひなされて侍り。勝といふ文字を付け侍るべし。かねごこの甘き契りは偽りと今ぞ我が身にしろこの餅かな 左右共不難申。判云、……丸 〔左〕 為勝。〔近世職人尽絵詞〕 〔油売〕 「少し負けて参らせ候ふ」、〔相撲取の荷持〕 「油のことにまれ、負くるとは心掛かりや」 / 「御代はめでたの若松様よなう。この次は曲搦きにせばや」 〔引摺り餅とは、お上様に禁句ぞ〕 〔自在餅にして、二搦き三搦き食ひたや。饅屋の手間取りではあるまいし、扇やばかりで食ふことならぬうたてさよ 〔足の強き餅かな。飛脚に食はせしたや〕 〔味よう投げてよ〕 〔略画職人尽〕 初手は身を搾るばかりの油売沁みて広ぐる得意場の数 〔宝船桂帆柱〕 油屋 生業の道暗からぬ

ゆへにこそ得意も減らぬ油商ひ / 餅屋 店つきもうまい 仕掛けは饅頭のあんに違はぬ金もち屋なれ 「小児葉王、肝涼円、版元取り次ぎ」〔難波職人歌合〕上 十六番右 油屋 月はげに心づくしの光かな大殿油もむなしかるべく 左の方人云、いかに油売なればとて、月の光のさやけきを心づくしと言ひて、かくても月の歌なりと思へりや、いかに。右方答、古歌に、月の影見れば心づくしなりと云へるを、げにと受けて、油の売れざらむことを嘆きたるにこそあれ。判に云、左の歌、……それに引き替へて右の歌は、既に左方より難ぜられたること、月にはつらき心頭れたり。古今集に、木の間に漏り来る月の影見れば心づくしの秋は来にけり、とある心づくしは、秋にかかれることなるを、心得誤れるよりの僻事なるべし。歌の姿はさすがなれど、左の勝と言ふべくこそ。 / 上 八番右 餅屋 いく臼の餅を鏡にまろめなほみ空の月の影にかも似ん 左の方人云、月日の大きさを物に譬へて計ることは昔の人もしつるあと、既に物に見えたれども、餅に譬へむことは似つかはしからじや。右方答、月の鏡といひ、また鏡餅といへば、かばかり似つかはしき譬へはあらじ。判に云、……また、月の形を計るにも、おのが職を忘れざること、ともに人とあるもの習はしといふべし。左右の方人達の論は強言なるべし。それにとりて、歌の姿は、詞といひ心といひ、右の方、立ち勝りて聞こゆ。勝と言ふべし。

【本文】

七番

よひことにみやこにいつるあふらうり

ふけてのみみるやまさきの月

見わたせは秋の田のものいなもちぬ

おほきにいつる山のはのつき

左哥、くれことにこそいふへけれ。夜やは

あふらうるへき。右哥は、あきの田のもの

いなもちぬ、まことにさる事ときこゆ。仍、

もちぬにつくへきにや。

山さきやすへりみちゆくあふらうり

うちこほすまでなくなみたかな

なからへて君とねのこはいさしらす

よひ―〔類〕宵 みやこにいつる―〔類〕都に出る

ふけて―〔類〕更て みる―〔尊〕〔類〕見る やまさき―〔類〕山崎

見わたせは―〔尊〕みわたせは〔類〕見渡は 田のもの―〔類〕田面

いつる―〔類〕出る つき―〔類〕月

くれ―〔類〕暮

右哥―〔類〕右歌 あきの田のもの―〔類〕秋のたのも

まことに―〔忠〕〔明〕ことに 事と―〔類〕こと、

つくへきにや―〔明〕つくべきや

山さき―〔類〕山崎 すへりみち―〔類〕すへり道 あふらうり

―〔類〕油うり

うちこほす―〔類〕打こほす なみた―〔類〕涙

みつかひとつもせめてあはゝや

左哥、二首なから第三句にあふらうりと

をける、ふところせはくきこゆ。そのうへ、此

哥の古事を思にも、山さきのうはか

もとにあふらかひにいたれはとこそ侍れ、

それをいま作者なれば、油うりとよめるも、

本説にたかふめり。只あふらかひと詠へき

にこそ。又、なく涙とはかりにては、恋の心うす

くや。右は、ともに本説をいひ出て、もちゑといふ

字をまはしてよめる、やさしくきこゆ。勝と申へし。



あふらうり

昨日からいまた

山さきにも

かへらぬ。

もちゑ□り

あたゝかなる

もちまいれ。



注解『七十一番職人歌合』稿(二)

みつー〔類〕三

古事ー〔類〕故事 思にもー〔類〕思ふにも

只ー〔類〕たゝ

心ー〔類〕こゝろ

字ー〔忠〕明ナシ

あふらうりー〔白〕あふら売〔忠〕^{七番}あふら売

昨日ー〔白〕〔忠〕類〔き〕のふ

山さきー〔白〕〔忠〕山崎 にもー〔白〕〔忠〕類へも

もちゑ□りー〔尊〕〔巨〕〔忠〕明〔類〕もちゑうり

もちー〔白〕〔忠〕餅

【語注】

◎油売は、荏胡麻えじまから取った点燈用の油を売る商人。室町時代前期には、石清水八幡宮の末社、離宮八幡宮に属する大山崎油座が、京都における油の専売権を有し、諸国の油商人をその支配下に置いていたが、応仁の乱以降は、幕府の衰退と戦国大名の擡頭によって、次第に独占権を失った。当職人歌合では、月、恋の歌、画中の職人の言葉、いずれも山崎（大山崎）の油売という設定になっている。

油売、餅売とも、以前の職人歌合には見えない。油、餅ともに神前に供えるもの、ということ、番にされたか。

◎よひごとに 油は夜使うので、油売は主として夕暮時に行商した。それを「宵ごとに」と表現したのだが、判詞はこれを難じている。

◎みやこにいづる 行商のため、都に出て来るのである。

◎ふけてのみみるやまざきの月 「山崎」は、大山崎油座のあった、山城国大山崎村（現京都府大山崎町）。いつも更けてからしか見られない山崎の月。都で油を売った後、深夜に山崎へ帰り着くのである。

◎見たせば秋の田のものいなもちる 「田の面」は、田の表面。「秋の田の面の稲」に「稲餅」を懸ける。その「稲餅」のように、「大きに出づる山の端の月」と下旬に続く。従って、「秋の田の面の稲餅」は、下旬の序詞となっていて、その意味では実景ではないが、秋の稔り豊かな田の稲を見渡しているというイメージを喚起する。

◎いなもちる 「いなもちる」は、古辞書には、『撮壤集』、『塵芥』に、「糞」の字を「イナモチ」と読み、『倭玉篇』（篇目）に「糞」の字を「イナモチ」と読み、『同』（夢梅本）に「糞」の字を「稲餅」と注する。「糞」「糞」は、『説文解字』に「糞、稲餅也……糞、糞或从米」とあり、米で作った餅のこと。すなわち「いなもちる」は、粟餅などに対して、いわゆる餅を言うのであろう。次に「大きに出づる」とあるから、鏡餅のような大きな餅を考えるべきかも知れない。「もちひ」は、「もちいひ」の転化と見られ、現代語の「もち」に同じ。古くは、ただ「もち」と言えば、鳥糞のことを指すか、または「糲」、すなわち、モチノヨネ、モチアハ、モチキビなどの汎称であって、それらの穀物から作った食品「餅」は、「もちひ」と呼ばれた。しかし、「もちいひ」は、鎌倉・南北朝期から第三音節

を脱して、「もち」とも言われるようになり、以降両形が併存したが、江戸時代以降は、「もち」が一般化して、現代に至った（日本古典文学大系『今昔物語集 一』補注二九一、および、小林 隆『もち（餅）』と「とりもち（鳥糞）」の語史』△『文芸研究』94）。当職人歌合では、職人名が「もちのうり」とされる他、歌の中に「いなもちる」（本項）とあり、判詞もすべて「もちる」であるが、画中の餅売の言葉では、「あたゝかなるもちまいれ」と、「もち」が使われている。「もちひ」が古風で雅語的な言葉、「もち」が当世風で俗語的な言葉、という対立があったのである。

◎おほきにいづる山のはのつき 稲餅のように、大きく（かつ、まん丸く）出る山際の月。月を餅に譬える手法は一般的。

◎くれごとにとこそいふべけれ 「宵」は、日が暮れた後の時間。夜の早い頃。それでは油を売るには遅すぎるので、「暮ごと」といふべきだ、というのである。

◎まことにさる事ときこゆ 「まことに」は、忠寄本、明暦板本は「ことに」とあるが、誤写であろう。まことにもともとだと納得できる。具体的にどの点を指してそう言っているのかは、分かりにくい。

◎もちめにつくべきにや 「付く」は、味方する、すなわちここでは、「いなもちる」の歌を勝と認めること。それを餅の縁語である「付く」（くっ付く）の「付く」、あるいは「搗く」か」という語をあえて用いて、洒落て言ったもの。このように、歌の内容に関係のある言葉でもって判を下すことは、正統の歌合でもまま用いられる戯法。なお、『餅酒歌合』一番判詞にも、「一番の左にて侍れば、もちひにぞ付き侍らめ」とあり、当歌合はこれを真似た可能性もある。

◎すべりみち よく滑る道。山崎付近は道が悪く、滑りやすかったのであろう。あるいは、山崎にこういう名で呼ばれた道が、実際にあったのかも知れない。「滑る」は、油の縁語。

◎うちこぼすまでなくなみだかな 油を「零す」と涙を「零す」とを懸ける。この歌を普通に読めば、油を零して、それが悲しくて涙を零すのだ、と取れるが、恋の歌であることを考えると、道で滑って油をこぼすように、恋

ゆえに涙を零すのだ、と解しなければならぬ。しかし、判詞にも言うとおり、ただ「うちこぼすまで泣く涙」というだけで、恋ゆえの涙と取らせるのは、かなり無理がある。

◎ながらへて 生き永らえて。実は、苦しい恋のために今にも死にそうだ、との含みがある。

◎君とねのこはいさしらず あなたと結婚して共寝することは（とても不可能だろうから）ともかくとして。「君と寝」に「子の子」を懸ける。「子の子」は、「子の子餅」で、『源氏物語』から出た言葉。葵の巻に、「その夜さり、亥の子餅參らせたり。かかる御思ひ（葵の上の喪中）のほどなれば、ことごとしきさまにはあらで、こなた（紫の上）ばかりに、をかしげなる檜破籠などはかりを、色々にて参れるを見給ひて、君、南の方に出で給ひて、惟光を召して、『この餅、かう数々に所せきさまにはあらで、明日の暮に参らせよ。今日はいまいましき日なりけり』とほほゑみて宣ふ御気色を、心とき者にて、ふと思ひ寄りぬ。惟光、確かにも承らで、『げに愛敬の始めは、日選りして聞こし召すべきことにこそ。さても子の子はいくつか仕うまつらすべう侍らむ』と、まめだちて申せば、『三つが一つにてもあらむかし』と宣ふに、心得はてて立ちぬ」とある。すなわち、亥の子餅（十月初めの亥の日に、万病を防ぐために食べる餅）をもじって、その翌日（子の日）、源氏と紫の上に出される三日夜の餅（新婚三日目の夜に食べる餅）を戯れて呼んだ言葉。結婚を暗示する。従って、「君とねの子」は、単に、君と共寝するというのではなく、結婚に至るという意味を持つ。なお、この『源氏物語』の故事も、『餅酒歌合』に引かれている。

◎みつがひとつもせめてあはさや 三つに一つ。また、三分の一。三度に一度ぐらひは、せめて逢いたい、というのである。前項の『源氏物語』に見える「三つが一つ」を引く（ただし、『源氏物語』の「三つが一つ」については、「四」を婉曲に表現したのだ、との説もある）。『源氏物語』の「三つが一つ」は、古来、源氏物語秘伝の一つとして注目されて来た言葉。餅と関連づけて、『職人尽発句合』餅司の言葉にも「三つが一つ」の語が用いられ、『徳和歌後万載集』巻十三にも、「……亥の子とて 配れる重の内輪同士 うなひ子供が 餅配り 子の子は三が 一のさま ……」という長歌が見える。

◎左哥、二首ながら第三句にあぶらうりとをける、ふとこぼせばくきこゆ 左歌については、先の月の歌もこの恋

の歌も、第三句に「あぶらうり」と置いた点が、才知に欠けるように思われる。「懐狭し」については、第五番語注参照。

◎古事 故事。これが何を指すかは未考。歌および判詞から推せば、山崎の姥の所へ油を買いに行つたが、帰り道で滑って油を零した、というような話であろう。「此哥の古事を思にも……とこそ侍れ」という語調からすれば、言うところの「古事」を字句どおり引用したように思われ、しかもそれが「……油買ひに行たれば」と、碎けた調子になつてゐることからして、この「古事」は、俗謡などの類であつたかも知れない。ただし、俗謡の類について「古事」とか、次に見えるように「本説」とか言ひうるかどうか。『嬉遊笑覧』巻九は、「今、童の月を見て『お月さまいくつ云々、おまんどこへ行た油買ひに茶買ひに』と戯れ唱ふる事あり。その義、弁へがたし。ただし『油買へに』云々いへるは、これももと物語にてありしにやと思し」とし、当職人歌合を引いて、「このこと、未だ考へざれども、さる物語より児戯は出たるか」とする。『嬉遊笑覧』に引くこの童謡は、例えば、「お月さまいくつ、十三七つ、まだ年若い、ねんねこちゃん生んで、誰に抱かしよ、おまんはどこへ行つた、油買ひに茶買ひに、油屋の前に氷張つて、滑つて転んで、油いっぱいかやいた、その油どうした、次郎の犬と太郎の犬と、みんななめてしまった、……」（和歌山県の童謡、『日本伝承童謡集成』二、天体氣象）という形で、全国各地に残つてゐる。なお、山城国伏見（現京都市伏見区）、油懸山西岸寺（天正十八年創建）の油懸地蔵の由来について、『拾遺都名所図繪』巻四は、「いにしへより、祈願ある者、燈油をこの像に灌ぐときはたちまち所願満足せり。昔山崎に住まるる油商人あり。ある時油を擔つてこの門前を過ぐるに、たちまち転びて油を流す。周章して擔桶を見れば、余残いくばくもなし。ただ茫然として立ち居たり。しばらくしてつくづく思ふやうは、これ命なり。もししからずんば災害あらん、帰り去らんにはしかずとて、残るところの油をもつて、この石仏に灌いで、一念の残執なく帰たり。それより幸ひ日々に榮えて、大福長者となりぬ。これより世に伝へて、願望ある輩は、油を懸けて諸願を祈るに、今なを靈驗新なり」と記す。これと同様の伝説が当時あつて、作者はそれによつて、「あぶらうり」の歌を詠んだのかも知れない。もしそうだとすれば、判者は誤解したことになるが（次項参照）。

◎作者なれば、油うりとよめるも、本説にたがふめり 「本説」は、和歌や連歌の典拠として用いられた、著名な物語、詩、故事など。本歌取りの本歌にあたる。油を買いに行った古事を本説に用いながら、作者が油売だから「油うり」と詠んだが、それは本説のいうところに反するようだ。

◎なく涙とばかりにては、恋の心うすくや 「泣く涙」というだけでは、何ゆえの涙か分からず、恋の歌としての内容が不十分ではなからうか。

◎ともに本説をいひ出て 左歌と同じく、本説を持ちだして。この本説は、前述の『源氏物語』葵の巻の一節を指す。

◎もちぬといふ字をまはしてよめる 忠寄本、明暦板本は、「字」を脱す。それでも意味は通じるが、誤脱であろう。「字」は言葉の意。「回す」は、『俊頼髓脳』に、「大方、歌を詠まむには、題をよく心得べきなり。……詠むべき文字、必ずしも詠まざる文字、回して心を詠むべき文字、支へてあらはに詠むべき文字あることを、よく心得べきなり。心を回して詠むべき文字をあらはに詠みたるもわろし。ただあらはに詠むべき文字を回して詠みたるも、碎けてわろし」とあるごとく、直接その言葉を用いず、遠回しに表現すること。ここは、「もちぬ」という言葉避けて、「ねのこ」「みつがひとつ」という言葉で餅を匂わしたところが、露骨でなくてよい、というのである。

◎昨日からいまだ山ざきにもかへらぬ 「山ざきにも」の「にも」は、白石本、忠寄本、類従本は、「へも」。夜遅くになって山崎へ帰れなかったのであろう。油売が夕暮時の行商人であることを、巧みに表している。油売の独り言とも、右の餅売に向かって言った言葉とも取れる。

◎あたたかなるもちまいれ 前項同様、一般の客に向かって言ったとも、左の油売に応じたとも取れる。

【絵】

油売は折烏帽子、直垂袴姿で草鞋履き。腰に腰刀を差し、火打袋を提げ、左手に柄杓を持っている。ただし、白石本、忠寄本には、柄杓は描かない。前に杓を通した曲物の油桶二つ。向こう側の桶には柄杓を二本載せている。右手の持ち物については、小学館『日本国語大辞典』の「あぶらうり」の項は、当職人歌合の絵を載せ、「油のついた手

をふく打ちわら、を持ち歩き……」とし、鈴木棠三氏編『日本職人辞典』は、「恐らく、これを揺り動かして音を立て、客寄せに使ったのであろう」とするが、いずれも納得しがたい。『法然上人絵伝』（四十八巻絵伝）卷三十三、安楽坊処刑の場に詰めかけた群衆の中に、曲物桶二つを枋で担った男が描かれている。後ろの桶の上に柄杓を載せていて、これも油売かと思われるが、後肩に、当職人歌合の油売の持ち物に似た物が見える。『新版絵巻物による日本常民生活絵引』は、これを箒と見るが、行商人が箒を持ち歩くはずもなく、形からしても不自然で、宮本常一氏の蓑帽子とされる（『法然上人絵伝に見える世相』〈新修日本絵巻物全集14『法然上人絵伝』所収〉）のが妥当であろう。また、卷三十五、讃岐国生福寺で法然の説法を聴聞しに集まった民衆の中に、枋を通した行器ほかいを前に置いて腰を下ろした男がいるが、この男は、たまたま当職人歌合の油売と全く同じ持ち方で、蓑帽子を手にしている。同絵伝には、以上の他にも、蓑帽子を被った者が少なからず描かれていて（卷四、卷三十四、卷三十五、卷三十八、卷三十九）、これらの帽子の描き方はいずれも、当職人歌合の絵と酷似している。これらのことから、当職人歌合の油売の持ち物も、蓑帽子ではないかと思われる。蓑帽子は、狩人のよく被る帽子である（『一遍聖絵』に多く見える）が、おそらく、山中などを行くのに適し、山崎の油売の典型的な被り物と考えられていたのではなからうか。

餅売は、頭巾、鉢巻をし、小袖を着ている。前の四角い箱（蒸籠か）には白い餅、横の曲物には、赤い斑のある餅が入れられている。後者は萩餅の類でもあろうか。ただし、白石本は、曲物の中身を描き落とし、類従本は、餅の斑点は描かない。

前稿訂正

前稿「注解『七十一番職人歌合』稿(一)」の中、第一番語注「めされ候」の項(七二頁)の一行目と七行目の「さぶらふ」は、橋本進吉氏『さぶらふ』か『さぶらふ』か(安藤教授還暦祝賀記念論文集)の説に従って、「さぶらふ」に訂正する。なお、この点に関しては、鈴木博氏の御教示を賜った。記して謝意を表する。

第三番本文(八七頁)の「とひ申さん」の脚注に、「尊」とひ申さむ」を補う。